

『生物の世界』を読む

——自然哲学としての今西自然学——

福井雅美

一八四

今西錦司（一九〇二—一九九二）を単に生物学者とのみ呼ぶのは適切ではないであろう。生物学プロパーに数えられる業績だけを見ても、水生昆虫カゲロウの分類・生態の研究と、それを通じてのいわゆる棲みわけ現象の発見に始まり、森林の垂直分布など広く植物界をも包括した「棲みわけ」の理論化、野生馬、ニホンザル、ゴリラ、チンパンジーらの群れの社会行動、とりわけ有名なイモ洗いなど彼らの「文化」をめぐる考察、さらに晩年の反ダーウィンの独自の進化論と、生涯に手がけた研究分野は多岐にわたっている（既存の分野を「手がけた」というよりも、新しく開拓したという方が適切な場合が少なくない。特に今西とその弟子たちのグループが日本の霊長類学を創始したことは、不滅の功績と評価されている）。のみならず、モンゴル高原の遊牧民研究をはじめとする文化人類学者でもあり、またヒマラヤ登頂をはじめ登山家・探検家としての実践も、生涯を通じて続けた。

これら広範囲に及ぶ活動が、決して器用貧乏的な、散漫なものになつておらず、常に自然を全体としてとらえるという姿勢で貫かれていたことは、現代の細分化した実証科学とは対極にあるものである。「物理学者が物質を通じて、自然観・世界観を論ずるとき、生物学者は生物を通じて、もっと積極的に、かれの自然観・世界観を展開すべきでなからうか」と、常に「自然観・世界観」の確立を意識していた今西の学問的スタン

スは、後年みずから「自然学」と名づけるところとなる。それは、ダーウィンのな正統派進化論に対する対決姿勢のせいもあって、必ずしも専門科学者には支持されていない。その意味では、それは哲学、すなわち自然哲学である。ただし、抽象的思弁に陥ることなく、どこまでもフィールド・ナチュラリストとしての身体的実感に裏づけされた哲学であり、既存の意味の科学でも哲学でもない、まさに「自然学」としか呼びようがないものであろう。

自然科学が人文学と分断され、ひいては知が人間から分断される「学問の危機」の現代にあつて、われわれはここに、今西の最初の生物学書にして後年のエッセンスをも含む原点である『生物の世界』（一九四一年）を中心に、今日のわれわれに対して今西自然学の意味するものを探ってみたい。

1 In-der-Welt-sein としるの生物

——「相似と相異」「構造について」「環境について」——

『生物の世界』は「相似と相異」「構造について」「環境について」「社会について」「歴史について」の五章より構成される。著者の序文によれば、本書の中心は第四章の社会論にあり、次いでその延長として書かれ

た第五章にある。それらを導くための準備として前半の三章が置かれて
いる。

全体の導入である第一章「相似と相異」の冒頭で、今西はさっそく彼の
「世界観」の一端を表明する。「われわれの世界はじつにいろいろなもの
のから成り立っている。いろいろなものからなる一つの寄り合い世帯と
考えてもよい。ところでこの寄り合い世帯の成員というのが、でたらめ
な得手勝手な烏合の衆でなくて、この寄り合い世帯を構成し、それを維
持し、それを発展させて行く上に、それぞれがちゃんとした地位を占め、
それぞれの任務を果たしているように見えるというのが、そもそも私の
世界観に一つの根底を与えるものであるらしい。」^②この世界が無秩序な混
沌ではなく、一定の構造を持ち一定の機能を発揮しているということは、
この世界を構成している「いろいろなもの」が、互いの間を何らかの関
係で結ばれているということにほかならない。

今西は世界を船、世界を構成する「いろいろなもの」を船客にたとえ
る。この世界という船の船客は、船の外からばらばらに乗り込んできた
わけではなく、はじめから船に乗っていたと考えざるをえない。つまり
船の中で自然発生的に生まれた船客であるにもかかわらず、あたかも切
符を買って乗り込んできたかのように、一等船客も二等船客も三等船客
も過不足なく、定員どおりに乗り込んでいるのは、「ちよつと不思議なよ
うにも思われる」。

空想的なたとえはさらに続く。「地球をさきほどの船にたとえてみよ
う。すると地球という一大豪華船に船客を満載しているというのは、現
在の地球のことであって、その船客が他から乗り込んできたのではないの
と同じように、この豪華船の建造に要した材料もまた他から持ち運んで
きたものではないのである。地球が太陽から分離して、それが太陽に照
らされながら太陽の周囲を回っているうちに、それ自身がいつのまにか

乗客を満載した、今日みるような一大豪華船となった」^③。文字通り「宇宙
船地球号」^④のアイディアを先取りしたたとえである点がわれわれには興
味深い。ともあれ今西は、こうした地球の変化を一種の生長ないし発展
としてとらえる。地球そのものの生長過程において、そのある部分は船
の材料となって船を造り、残りの部分は船客となった。船も船客も、元
来一つのものから分化した。船が先でも船客が先でもなく、船は船客を
乗せんがために船となり、船客は船に乗りながらため船客になっていつた
のである（船客のない船や、船のない船客というのは考えられないがゆえに）。
船客が生物、船が無機的環境を指すことは明らかだろう。無生物も動物
も植物も、元をたどれば同じ一つのものから分化発展してきたのであり、
根本関係でつながれている。

そこから、章のタイトルである「相似と相異」という事象にも答えが
与えられる。この世界には「いろいろなもの」、つまり多様に異なったも
のが識別される。しかし、完全に異なったものばかりであったなら、も
はや異なっているということすら識別されないはずであろう。異なるこ
とは、似ていることがあって初めて意味を持つ。「いろいろなもの」は、
互いに孤立した単数的存在ではなく、同時に似ているもの同士の複数的
存在を前提している。これは、それらが元は一つのものから分化発展し
てきたのだから当然である。世界はその生成発展の過程において、互い
に何らかの関係で結ばれた相異なるものに分かれていったのと同じく、
互いに何らかの関係で結ばれた相似たものに分かれていったともいえ
る。相似と相異は、一つのものから分かれたもの間に、元々から備わつ
た一つの関係である。

われわれはこうした相似や相異を、いちいち比較考量や判断をさまざま
ずとも、見ればすぐにわかる。すなわち、直観的にもその関係にお
いて把握している。ものの相似や相異がわかるのは、「われわれの認識そ

のものに本来備わった一種の先験的な性質^⑤であり、それは「認識対象である」ものの生成とともに、われわれ「の認識主観」もまた生成していった^⑥。ことの帰結である。すると、そうした世界を認識するという性質は、われわれのみならず他の生物すべてにも、程度の差はあれ備わっていると考えねばならない。「猿は猿の世界を持ち、アミーバはアミーバの世界を持ち、また植物は植物の世界を持つ」が、ただし「猿の世界はアミーバや植物の世界よりもわれわれ人間の世界に近く、またそれらをひつくるめた生物の世界のほうが、無生物の世界よりもわれわれの世界に近い」。類縁関係が、ものの見方の基準であり、「ここにわれわれに許された類推の根拠がある」^⑦。

ここで登場する「類推」という語は、二〇〇二年出版の英訳において「our understanding, through our resemblances, of the lives of other things」とかなり長い語句に訳された。その箇所につけられた脚注でも、「類推」は「analogy」と訳されるのが通例だが、今西の場合はより広い意味を含み、「an intuitive logic about similarity and difference」ないし「a degree of empathy with other living things」の意に解されるべきであると記されている^⑧。今西の本文に戻れば、「いったいわれわれは類推といえ、一種の思考作用のようにはかり思いやすいが、類推とはその本質において、「中略」われわれがものの類縁関係を認識したことに對する、われわれの主體的反応の現れにはかならない^⑨」。その反応が、喜び、驚き、恐れ、愛憎等、何であるにせよ、それは既に世界に對するわれわれの働きかけである。しかも「たんなるわれわれの働きかけではなくて、われわれへの働きかけを予想した上での、われわれの働きかけである」^⑩。こうした、人間と他の生物との主體的な働きかけあいにもとづく「類推」を合理的な形で行っていくことが、科学としての生物学の課題であり、それは生物を——自動機械ではなく——生物としてその正当な立場にお

いて研究することであると第一章「相似と相異」はしめくくる。

第一章の紹介が長くなったが、要するにここでは「一つのものからの分化発展」ということが強調されている。後年みずから「若いときに西田哲学をかじり、その影響をうけて『生物の世界』を書いた^⑪」と認めるように、たとえば『善の研究』の次のような一節との類似は容易に看取されるだろう。「實在の根本的方式は一なると共に多、多なると共に一、平等の中に差別を具し、差別の中に平等を具するのである。而してこの二方面は離すことのできないものであるから、つまり一つの者の自家発展ということができる。独立自全の眞實在はいつでもこの方式を具えている、しからざる者は皆我々の抽象的概念である」^⑫。

第二章「構造について」は、心身二元論あるいは物質と生命の二元論に對する批判を内容とする。生物の構造的特徴は、細胞からなるということである。生物の体を構成する無数の細胞は、すべても一個の細胞（受精卵）から生成発展してきた。はじめからできあがった生物の構造などというものはなく、生物の構造とは、生成発展したものである。生長することが、すなわち生きることなのであり、生物の体や構造は、生きた生物を離れては考えられない。したがって、死物としての身体に「なものか」が宿り、その「なものか」が働いて初めてこれを生かしているというような、生命を「あとからくつつける」考え方は厳しくしりぞけられる。

こうした生物のあり方を今西は「構造がすなわち機能であり、機能がすなわち構造である」^⑬と述べたり、「身体即生命、生命即身体というのがすなわち具体的な生きた生物なのである」^⑭と表現したりしている。生物が構造的即機能的な存在であることは、「作られたものがつねに新しいものを作って行く」——西田ならば「非連続の連続」と呼ぶ事態——ことにより生物がみずからをこの世界に持続する新陳代謝の活動に現れて

いるが、これは、この世界が「空間的即時的」であることを反映している。「構造とか身体とかがまずあってあとから機能や生命が生じたり与えられたりすると考えることは、空間がさきにあつてあとから時間が生ずると考えるようなものであり、生命と身体とを別々にみる考え方は、時間と空間とを別々なものと考えるのに等しい」^⑮。

さらに生長が構造的即機能的現象であるならば、逆に死んで無機的物質へと解体していく場合もまたそうであり、つまり無生物もまた構造的即機能的存在ではないか、と今西は現代物理学の物質観をも参照しつつ考察する。その意味で無生物にも、いわば無生物的生命が認められる。生物は「無生物的生命を取り入れ、これを同化することによって絶えずその生物的生命を發展さして行く」のであり、「この世界に生命のないものはない、ものの存するところにはかならず生命がある」という主張は、次章の環境論につながっていく。

第三章「環境について」も、その主眼は二元論批判にある。つまり、われわれ人間を含む生物にとつて、環境とは、自己と区別される単なる「外界」ではないということである。

われわれの空間的即時的な世界にあつて、すべてのものに、みずからを維持し、現状を維持しようとする傾向があるのは、世界の空間的性格に由来する。一方で、万物を流転させようとする傾向もまたあるのは、世界の時間的性格に根ざしている。この世界で存在を続けていくために、「生物は作られたものが作るものとなつて、みずからと似たものをどこまでもこの世界につくり与える」^⑯。そのさい、生物が一定の空間的形を持つことは、一つのそれ自身として完結した独立体系であることを意味する。すなわち個体であることは、生物における統合性の現れである。独立したシステムであるとはいえ、生物個体は環境を離れては存在しえず、むしろ環境をも包括した一つの体系において存在する。だが他方で、外

界や環境というものが既に存在していて、そこに生物が発生してきたのでもない。生物が先でも環境が先でもないことは、第一章の船と船客のたとえにあつた通りである。

生物と環境との関係を、ここで今西は「認識」というキーワードを使って説明する。もつともそれは、人間のような低い高度の認識能力や神経中枢の存在を意味せず、生物が働き、生活することの言いかえなのであるが。生物が生活していくには、食物を摂取し、敵を避けねばならない。しかし、自分に同化しえないようなものでやたらに取り入れたら、自分の仲間と敵との見境がつかなくなったりすれば、スムーズに生活していくことはできない。生物にとつて食物とは、自己の体内に取り入れられたから食物なのではなくて、既に環境に存在するうちから食物でなければならぬし、敵は、それに殺されてから敵とわかつては遅いであつて、害され殺される前に敵なのでなくては意味がない。したがつて、生物が食物を食物として認めることは、食う前から既に同化の第一歩なのである。「こうして生物が生物化した環境というものは、「中略」生物がみずからに同化した環境であり、したがつてそれは生物の延長であるといふのである。」認識とは、ものを何らかの意味において自己のものとし、自己の延長として感ずる働きかけである。「生物はまず生活するのに必要なものを認識すればよい。いや認識しなければならぬ。それ以外の必要でないものは認識しなくたつていいのである」^⑰。

環境とは、その生物の認識し同化する世界のことであり、そこにその生物が生活する「生活の場」である。ここで——今西自身はおそらくほとんどあらず知らぬことであろうが——勝手にハイデッガーの用語を使わせてもらえば、人間に限らず生物は生きているかぎりみな *In-der-Welt-sein* であるといえようか。^⑱ あるいはむしろ、ユクスキユルの環世界 (*Umwelt*) 概念^⑲の顕著な類似を見ることができよう。

生活の場とは、単なる生活空間ではなく、生物そのものの延長である。これを逆の側からいえば、身体も生命も個体内に束縛されたものではなく、世界に広がる場（フィールド）的なものである。「生物とその生活の場としての環境とを一つにしたようなものが、それがほんとうの具体的な生物なのである」²¹⁾。生物が生きていることは、食物を摂るべき時に摂り、敵を避けるべき時に避けるといふふうにして、環境をみずから同化し統合していくことである。その意味で、いわゆる高等・下等を問わず、あらゆる生物には「主体性」が認められる。以上の第三章の内容は、「生命」というのは「中略」主体が環境を、環境が主体を限定し、主体と環境との弁証法的自己同一でなければならぬ²²⁾という西田の哲学を、生物学者の視点から解釈したものとみなすことができる。

二 Mitseinとしての生物

——「社会について」「歴史について」——

環境に対して主体的に生物はふるまう。環境とは、通常考えられるように、数値として測定される温度、湿度等々のような無機的・物質的要因につきるのではない。生物に認識されるものが環境である。認識とは働きであり、必ずしも意識作用を伴わない。われわれが暑い時汗が出るのと同じく、植物が葉の気孔から水分を蒸散させるのも、環境の認知である²³⁾。いずれにしても生物は、環境に対して（リ）アクションを起こすアクティブな存在であり、決して受身的に環境によって決定されるものではない。

では、生物のすみ場所つまり分布はどうやって決まるか。その点に関し今西は当時の生態学に対して一線を引く。後年の文章を見てみよう。「当時の生態学の風潮として、生物の分布はだいたい環境の無機的要因に

よって決定される、と考えられていたのである。しかし、わたしは野外における豊富な観察資料から、生物の分布限界は、各個生態学の実験結果に現われたような、無機的要因に対する一種の生理的限界を現わす場合よりも、むしろ多くの場合、わたしが同位種と呼んだ近縁の種に対する一種の社会的限界である、と考えた。つまり生物個体としては、この社会的限界を突破して、その生理的限界までひるがりうる可能性をもつていても、ここで二つの社会がぶつかったときには、個体としてはなく社会として、ここに一つの境界線が生ずる。それは社会的なテンション・ラインである²⁴⁾。具体的に考えられているのは、もちろん今西が一九三三年に京都の賀茂川で発見したヒラタカゲロウ幼虫の「棲みわけ」である。形態のよく似た——つまり近縁と考えられる——四種類の幼虫が、川の中にランダムに混在することなく、川岸に近い流れのゆるい所から、流心部の流れの速い所へいくにしたがい、エクディオナラス・ヨシダエ、エペオラス・ラティフォリウム、エペオラス・カーバチュラス、エペオラス・ウエノイの順に整然と並んでいる。しかもそれは、毎秒何メートルというような物理的な流速だけで決まっているのではない。「カーバチュラスが下流になっていなくなるようなところへゆけば、ラティフォリウムとウエノイが、両側から拡がってきてその領域を埋めてしまう」し、また「夏になって賀茂川の水が涸れだし、したがって流速もいちじるしく減少するときがきて、一度固定した棲みわけが、ある程度までは持続すること」を今西は発見した。そうして「このような棲みわけは、第一義的には一種の社会現象である²⁵⁾」と結論づける。In-der-Weltseinである生物は、またMitseinなのである。

『生物の世界』第四章へ戻ろう。生物にとって種とは「種社会」であり、個体はその成員であるというのが、本章の主旨である。

世界を形成しているいろいろなものが、異なっているにもかかわらず

相似していることを今西は「世界構造の原理」と呼ぶが、世界が流転し混沌化してしまわず構造を持つということは、そこに何らかの平衡、つまり力のつりあいが存在するということである。力とは生物の場合、生活力ということができ、生活力がつりあうとは、二匹の生物が互いの環境に対して侵入しないことを意味する。同じ生活力ないし同じ生活内容(何を食い、どのように暮らすか)を持った生物とは、生物学上でいう同種の個体であるが、かれらが生活内容を同じくするとは、同じ環境を要求するということにほかならない。したがって同種の個体同士は、同じ生活内容を持つがゆえに原則として相容れない、つまり同一の環境空間を共有することはできないが、しかしまた同じ生活内容を持つがゆえに、相集まってきた、連続した環境を棲みわけけることは可能である。それは「同じ生活内容をもった生物が環境に対して働きかけた主体的行動の当然の帰結」であろう。

生活内容を反映するものとしてとらえられた生物の形態を「生活形」という。同種の個体同士は、生活形を同じくする生物である。かれらの間には、同種他の個体の存在に対して反応をあらわす、つまり同種個体を「認める」という働きがあると、今西は、たとえば原生動物において二匹の個体が接近していると分裂が促進される例を引いて述べる。この「認める」働きが高度な自意識である必要はもちろんなく、意識の発達の度合が低い動物にあつては、むしろ同種他の個体を自分の身体の延長ぐらいにみなしているのではないか、との指摘は興味深い。ともかく、生活内容を同じくする生物は、自己の個体を維持するべく個体間の平衡状態を求め、そのことが必然的に同種の個体の集まりを作らせる。こうした集まりが生物の「社会」あるいは「社会生活」である。今西は「種」を定義して「その中で個体の繁殖し、また栄養をとる一つの共同生活の場」とか「同じ生活形をとる個体から成り立った、一つの社会であ

る、あるいは一つの生活形社会である」と表現する。種は、単なる分類学的種ではなく「種社会」なのである。

一つ一つの種がそれぞれ「種社会」をなすが、いくつかの種社会同士の間には、賀茂川のヒラタカゲロウに見られたように、生活形や形態が似つとも異なり、互いに分布が重ならない「棲みわけ」が存在する。棲みわけ関係にある種のことを「同位種」、それらの集まった、種社会より一ランク高次の社会を「同位社会」と呼ぶ。それら同位種は、元来、類縁関係の近いもの同士であった。すなわち「相容れないといっても、その相容れない傾向さえ除いたら、あとはすべて相容れるような間がら」であった。そのため、互いに相容れ平衡を得るために棲みわけようになつたと考えられる。さらに、分類学的には近縁ではないが、たとえばカゲロウと同じく溪流の底の石に棲んでいるブユ、アミカなどの昆虫たちは、カゲロウ同位社会とともに同一場所を棲みわけて一つの生活形共同体(昆虫共同体)を形成する「複合同位社会」に属している。そして、最も高次にくるのが「生物全体社会」、全体としての生物の世界である。種社会—同位社会—複合同位社会—生物全体社会という、この階層構造を通じて、生物の動的な働きかけあいと均衡という論理が一貫していることがわかる。たとえば、通常、殺伐とした「弱肉強食」のイメージでとらえられがちな食う・食われるの関係も、今西によれば、全体社会の平衡を保ち、つまり互いに共存するための「分業」として、今日みるような形に発展してきたと理解されるのである。

従来、ハチやアリといったいわゆる「社会性昆虫」や、鳥やケモノの群れのような集団生活者を除けば、「社会」を生物に認めないのが生物学の主流的立場であった。それは、集中(集団生活)を社会と同一視する誤りにもとづく、と今西は指摘する。生物界には、集中よりも分散して単独生活するものの方が圧倒的に多く見られるからである。それに対し今

西は、生物はそもそもすべて社会的存在——互いに働きかけあう存在——であり、分散も集中もその働きかけあい方の、すなわち社会の一つの相（フェーズ）にすぎないと考える。また「原則として人間社会と生物社会とは絶縁されたものではない、その相異は要するに進化の相異である」³⁶とも述べる。「社会性ということは、このもとは一つのものから生成発展し、どこまでも相異なるものの世界においてどこまでも相似たものが存在するという、この世界の一つの構造原理であり、それが構造原理であるというゆえんは、相似たもの同士はどこまでも相対立しあうものであり、相対立しあうもの同士とはどこまでもその対立を空間化し「すなわち棲みわけ」、空間的に広がって行かねばならない存在として、社会性はこの空間的、構造的一面を反映した、この世界を形づくるあらゆるものに宿っている一つの根本的性格なのであるかもしれない」³⁷。進化とは、種社会が生活の場を棲みわけて枝分かれ的に分離していき（以後さまざまな著作で今西は「進化とは棲みわけの密度化である」という表現を好むようになる）、そうして異種間関係が増加して生物全体社会が複雑化し発展していくことなのである。

「実在は一に統一せられていると共に対立を含んでおらねばならぬ。ここに一の実在があれば必ずこれに対する他の実在がある。「一つの種社会があれば、それと棲みわけ、同位関係をなす他の種社会がある。」而してかくこの二つの物が互に相対立するには、この二つの物が独立の実在ではなくして、統一せられたるものでなければならぬ、即ち一の実在の分化発展でなければならぬ。「棲みわけるのは、もともと類縁を共通にしているからである。」而してこの両者が統一せられて一の実在として現われた時には、更に一の対立が生ぜねばならぬ。「中略」かくして無限の統一に進むのである。これを逆に一方より考えて見れば、無限なる唯一実在が小より大に、浅より深に、自己を分化発展する「棲みわけが密度化し

ていく」のであると考えることができる。此の如き過程が実在発現の形式であって、宇宙現象はこれに由りて成立し進行するのである。「中略」生物の生活は実に斯の如き不息の活動である」³⁸という西田の文章は、このように「」内を補って敷衍するなら、まさに棲みわけのロジックとして読むことができる。棲みわけとは、相対立しながらも相補う生物同士の平衡と共存の原理、その意味で安定の原理である。しかし、生物は決して安定に甘んじることはない。安定の中にも新たな対立が生じ、また新たな平衡が求められていく。進化を論じる第五章「歴史について」は言う。「およそこの空間的・時間的な世界において、絶対の現状維持はなものにも許されない。生物が生きているということの根底もこの現状維持が許されないとある。生物が生きているということは働くということであり、作られたものが作るものを作って行くということである。「中略」進化は創造であり、創造性は生きるものの属性であると考えられねばならない」³⁹。

進化をめぐるこの第五章では、当然、後年ますます主題化していくダーウィニズム批判が、既に基本的な形で述べられている。今西のとらえるダーウィニズムとは生存競争と自然選択を柱とするが、生存競争とは、バラバラの遺伝的変異を持つ（さしあたり同種の）個体同士が、食物や資源をめぐる互いに競争することである。それは、負けた方が滅びる熾烈な戦いである。だが、いろいろな星から移住してきたものがはち合わせたならいざ知らず、地球という船に最初から一緒に乗り合わせ、というより船の中で共に生きてきたもの同士の間に、そうした闘争がおこるものだろうか——という考えを、今西は後年まで持ち続けた⁴⁰。そもそも、アトム的に孤立した個体というダーウィニズムの出発点を今西は採らない。第四章で論じられたように、個体は種社会の一員としてこそその個体なのである。「個体が種の中に含まれているといえらるとともに、どの個体

の中にも同じように種が含まれている。どの個体からでも種はつくられて行く可能性がある。個体はすなわち種であり、種はすなわち個体である。³⁸「個体に優劣という意味での甲乙はなく、どの個体が生き残ろうと種は支障なく維持されていくようにできている。したがって、生存に影響するような変異がバラバラな、つまりランダムなものであることは考えられない。」そもそも種とはなんであったか。それは一つの血縁共同体として同じ身体をもつゆえに同じ生活をなし、同じ生活をなすゆえに同じ身体をもった個体の地域的な広がりであった。しからばいまこれを一歩進めて考えると、同じ生活をなすものであるゆえにこれらは同じ生活の方向を持ち、したがって同じ変異を現わすべく方向づけられているといえるであろう。³⁹」

もう一つの柱である自然選択に関しても、それが示すのは、環境によって一方的にふるいにかけられる受け身の生物像であり、今西の主體的な生物像とは対極にある。「生物と環境とを別々のものに考え、そのような抽象化された生物と抽象化された環境とを因果関係によって結び⁴⁰と」する機械論的考え方では、生物の具体的生活は説明できない。第三章で論じられたように、生物が環境を認めることは環境に対する働きかけであり、生物が環境を、みずから同化するべく選択することである。食物をとる、敵を避ける、配偶を求める等々、みな生きるための必然が要求する事柄ではあるが、これらの食物、敵、配偶を環境の中から認め、つまり選択することは、生物の自由の現れにほかならない。この生物が生きているという「必然の自由」、「決定にして未決定」を通じて新たな身体⁴¹の創造すなわち進化はなされていくのであり、「単なる必然、単なる決定をもってしては、生物の進化はついに解きえない謎とならざるをえない⁴²」であろう。

以上の第四・五章においても、たとえば「個物は生れるものでなければ

ならない。生れるというには、種というものがなければならぬ。そういう意味では、個物は種的であるのである⁴³」といった西田の哲学との表⁴⁴現上・内容上の類似が顕著である。しかし、重要な相違を見落としてはならない。西田は人間以外の動物（まして植物）に社会性・歴史性を認めず、それらを人間固有のものとする点で哲学、少なくとも西洋哲学の伝統に忠実に従った。「西田は西洋的すぎる」という、今西が折にふれもらす不満は、そこに原因があると思われる。「生物の種には種の個性があり、種の歴史がある。歴史を自然に対立させ、歴史を人間だけのもののように考える人たちの反省を促す必要がないであろうか⁴⁵」と提起する今西は、西田哲学の徒でありながらも西田を、および従来すべての哲学者を越えている。そうさせたのは、フィールドワーカーとしての豊富な体験からきた実感であった。

三 自然学の方法

若き日に生態学を志したいきさつを後に回顧した有名なくだりがある。「わたしは谷ぞいの道を歩いてきた。灌木の葉の上に、バッタが一匹とまっていた。そのとき思った——おれはいままで、昆虫をやたらに捕らえて、毒瓶で殺し、ピンでとめ、名前をしらべて喜んでいたが、この一匹のバッタが、この自然の中でいかに生きているかということについては、まるでなにも知らないではないか。これでは情けないと思ったのである。たまたま卒業論文には、なにをやるかと迷っていたときだった。わたしは生態学をやるかと決心した。⁴⁶」一匹のバッタに対するセス・オブ・ワンダー。以後長きにわたる今西の研究生活を一貫して導いたのは、このセス・オブ・ワンダーではなかったらうか。

今西が自己の学問を「自然学」の名で呼ぶようになるのは、一九七五

年の「今西自然学」について「あたりからであるようだが、本稿の最後に、『生物の世界』に始まり晩年にかけて展開していった彼の学問、すなわち自然学的方法的特徴を確認しておくことにしたい。

彼が自然学と言う場合、強く意識しているのは、近代科学の「細分化」に対する拒否姿勢である。細分化とは、個別諸科学の専門分化を指すとともに、各個別科学内部における、実験と分析を旨とした還元主義的手法のこともある。「ぼくのいう自然学というのは、自然科学と社会科学と人文科学とを分ける、今の学問のシステムにおさまらんところが生じてくる。今の学問でモデルとされているのは、自然科学の一番基礎学料である物理学ということになってきているけれど、物理学だつてもをたせば自然現象をいかに解釈したらいいかという自然学から出ている。それがだんだん洗練されたのか、偏ったのか知らんけれども、いまみるような物理学になってしまったんです。」⁴⁷ 実験科学は自然現象を解釈する方法の一つであるにすぎず、それによって切り取られてくる「今日の科学の取りあつかいという現象というのはいわば氷山の一角」⁴⁸でしかない。にもかかわらず、海面の下に隠れた部分を、今日の科学は、まるでないもののごとくに考えている。ここで氷山にたとえられているのは、もちろん自然全体である。氷山の全体をとらえるには「もう一度今日の科学の母胎ともいべき自然学に立ちもどる外にはないのではないか。自然学とはなにかそういう全体の統合原理を秘めたもののように考えられないであろうか」と今西は提起する。「全体自然を対象とする学問」⁴⁹、「生物と自然とをそのままの一体としてつかむ方法」⁵⁰、「自然を客観的に扱うことではなく、自然にたいして自己のうちに、自然の見方を確立すること」⁵¹と、さまざまな表現で定義される自然学は、『生物の世界』で述べられていたように、われわれを含むすべてのものが元は一つのものから分かれ発展してきた、その元の全体に到ろうとする試みをあらわしているとい

えるだろう。

全体をつかむために重視される方法が、直観である。それは直観が、反省的意識以前の主客未分、主客合一の状態において成りたつからだが、ここで今西が直観を身体や行為と深くかかわらせて理解している点に注意したい。「全体感」すなわち「体全体の感覚」による直観的把握の例として、今西はよくオリンピックの体操選手の巧みな身体操作を挙げが、それ以上にそうした身体感覚を彼は「自然の中に入って行って自然全体とかけひき」⁵²するみずからの登山体験で日々得ていたのだ。また、賀茂川のカゲロウ研究を通じて得られた「種社会」の概念も、一種の直観的ひらめきであったのだが、じつと頭の中で考えて生まれたというよりは、「自然というものを相手にし、なんとかしてこの自然というものの素性が知りたくて、十年間ほど自然のなかに入りびたっているうちに、そういう概念が已むにやまれずして、突如出現した」、したがってこの概念は「自然と私との合作である」と今西は述べる。⁵³ 主客の垣根をはらって身体ごと自然にすみこみ、まさに「ものとなって考えた」⁵⁴ 行為的直観の所産が、棲みわけ理論だつたといえよう。

「直観というのは、われわれが動物の時代に、あるいは言語以前の時代に、生活のためのコンパスとして獲得したものである。」⁵⁵ それは無意識的、身体的なものであるがゆえに、人間だけの能力ではない。むしろ、各々の種社会の成員であるすべての「生物は相手が自分と同じ種に属する個体だということ」を、判断するのでなくて、直観によって知ることができる。⁵⁶ それは、かれらが同じ（または似た）生活の仕方を持ち、同じ（または似た）身体の使い方をするからである。そこに同種のもの同士、あるいは近縁のもの同士の「共感」にもとづく理解とコミュニケーションが成りたつ。⁵⁷

『生物の世界』で述べられていた「類推」という方法、すなわちわれわ

れとの類縁関係の親疎に応じた相似と相異の直観的把握は、こうした共感的理解と深いかわりがある。ニホンザルやチンパンジー、ゴリラを、まるで人間に対することくに一頭一頭個体識別して名前をつけ、野外環境のもとで長期観察し、かれら自身になり代わりかれらの群れ社会の「歴史」を克明に記録していくという今西の霊長類研究は、サルたちに対する共感的理解の試みだったといえるだろう。⁵⁸ もちろん、今西および彼のグループに対しては、当時も今も、しばしば擬人主義という批判が寄せられている。しかし今西は、反擬人主義の論理にひそむトリックを既に見抜いていた。「自然と人間とは、類型的につかめば、およそ対蹠的な存在であるし、文化・歴史・社会は、いずれもすぐれて人間的なものである」とされる。しかし、類型をつかんで対立させるとは、二つの類型の間にあるもやもやしたものを消して、違いだけをくつきり浮きあがらせることであり、つまり人間を自然に対立させる場合には、人間に最も近い自然であるトリ・ケモノ・類人猿などが、いつも消される立場にある。そうやって、たとえばバクテリアや線虫で自然を代表させる操作をあらかじめ加えた上で、文化・歴史・社会は自然には見られない人間の側の特徴だと言うのは、論点先取にほかならない。そうした論点先取のバイアスのかからない、その意味で「正しい擬人主義」の使用を今西は主張した。⁵⁹

とはいえ、今西における「直観」の位置づけには、やはり問題がなくてもない。以上に見てきたところから明らかなように、方法としての直観と、内容的な意味での直観——「動物は直観で行動する」のような——とが混同されてしまっている。だが、動物が直観で行動するということを、オーソドックスな還元主義的手法で実験的に確かめることは、原理的に可能である。また、「物理学だつてもとをただせば自然現象をいかに解釈したらいいかという自然学から出ている」という表現からは、自然

学が方法論として構想されており、物理学、生物学等々に対してメタレベルにあるような印象を受ける。つまり自然学は、物理学や生物学と同一水準で競合するものではない。だから、それらの学が還元主義的手法を用いて自然の一面を切りだしてきたとしても、それによって得られた知見は、それはそれとして有効なはずである。ただ、それを氷山のすべとみなし海面下に隠れた部分はないと思っただけではない、という戒めなり注意喚起を外から与えていくことが、自然学の役目なのである。本人がそのところを混同して、生物学理論の内容そのもの（自然選択の否定など）にタッチしてしまったのは、カント風にいえば regulativ（統制的）な原理を konstitutiv（構成的）に用いる誤りをおかしたわけで、確かに今西の弱点といえるだろう。

しかしながら、方法と内容との峻別は、既に主観と客観との分断にもとづいており、それこそが、まさに悪しき抽象の所産だともいえる。元は一つのものから「もの」「客観」の生成とともに、われわれ「主観」もまた生成していった」と固く確信する今西にとって、方法が内容を巻きこみ、内容が方法を巻きこむことは必然であった。「人間も動物も植物も生物であるという点では、お互いに類縁関係のつづいた相似たものなのであるから、「中略」こうした相似た性質の存在を認め、それをわれわれの言葉によって、われわれに理解されるように適切に表現する、ということがすなわちわれわれのそれらの生物に対する認識の表現であり、このように生物を生物の立場において正しく認めるということがまた、われわれをわれわれの立場において正しく認めることにもなるのである。」⁶⁰ 生物を認識することは、人間にとって自己認識なのである。

一九世紀後半、実証主義科学によって動植物は物質ないし機械とみなされるようになった。そこへ進化論が現れ、人間と動物との連続を明ら

かにする。では、自分たちも物質や機械になってしまふのか？という危機感に人間はさらされることになった。

この危機にあつて哲学・人文学は、「動物の機械化」に対してはほとんど手をつけず、もっぱらみずから動物から切り離すことで「人間の機械化」から身を守る道を選んだ。それが一九世紀末から二〇世紀にかけての実存主義、現象学の流れではなかつたろうか。人間の立ち位置を今日改めて問い直すとき、『生物の世界』は多くのことを教えてくれるように思われる。

注

- 今西の著作からの引用は『増補版 今西錦司全集』全一三巻別巻一（一九九三—一九九四年、講談社、以下『全集』と略記）にもとづき、その巻数とページ数を示す。
- ① 『生物社会の論理』（一九四九年）、『全集』第四卷三三ページ。
 - ② 『生物の世界』、『全集』第一卷六六ページ。
 - ③ 同、七七八ページ。
 - ④ バックミンスター・フラウ『宇宙船地球号操縦マニュアル（Richard Buckminster Fuller, *Operating Manual for Spaceship Earth*, New York, 1969）』（片沢高志訳、ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）をはじめとして、一九六〇年代後半から世界的にポピュラーとなってくる表現である。
 - ⑤ 『生物の世界』、『全集』第一卷一一一—一二二ページ。
 - ⑥ 同、一二三ページ。「」内は引用者による補足。
 - ⑦ 同、一四三ページ。
 - ⑧ *A Japanese View of Nature. The World of Living Things*. Translated by Pamela J. Asquith, Heita Kawakatsu, Shunsuke Yagi and Hiroyuki Takasaki. Edited and introduced by PJ Asquith. Routledge Curzon, London / New York, 2002, p.5.
 - ⑨ 『生物の世界』、『全集』第一卷一五三ページ。
 - ⑩ 同、一六三ページ。

- ⑪ 「トリ・サル・人間」（一九六〇年）、『全集』第七卷一八七ページ。
- ⑫ 西田幾多郎『善の研究』（一九一一年）岩波文庫、二〇〇八年第九六刷、九四ページ。なお、『生物の世界』前掲英訳書の訳者の一人パメラ・アスキスによれば、今西の哲学的ルーツは西田だけではなく、今西は一九三八年に入手したJ・C・スマッツの『ホーリズムと進化（Jan Christiaan Smuts, *Holism and Evolution*, New York, 1926）』（石川光男ほか訳、玉川大学出版部、二〇〇五年）からも、その全体論哲学の影響を受けているという。アスキス「社会性および進化の所産に関する今西錦司の観点を示す諸資料」『生物科学』（日本生物科学者協会／農文協）第五七卷第三号、二〇〇六年四月、一四五—一五七ページ。
- ⑬ 『生物の世界』、『全集』第一卷三二二ページ。
- ⑭ 同、三五三ページ。
- ⑮ 同、三九一—四〇二ページ。このあたりの「構造的即機能的」「身体即生命、生命即身体」「空間的即時間的」といった「即」を多用した言い回しには、もちろん西田の強い影響が現れているとみてよい。「絶対否定の弁証法」というのは、個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定、時間即空間、空間即時間ということではなければならない。「論理と生命」（一九三九年）、西田幾多郎『哲学論集Ⅱ』上田閑照編、岩波文庫、一九八八年、一八五—一八七ページ。
- ⑯ 『生物の世界』、『全集』第一卷四四三—四四四ページ。
- ⑰ 同、五〇三—五〇四ページ。
- ⑱ 同、五六三—五六四ページ。
- ⑲ とはいえ、もちろんハイデッガーは、人間つまり現存在に対してしかこの語を用いない。人間の Sein は Dasein だが、動物の Sein は Leben であり、存在の仕方が根本的に異なっている。動物は、石のように無世界的（wellos）ではないものの、有るものとしての開けとしての世界をさまざまに持たず、世界貧乏的（welarm）であると言われる。人間と動物との間の強固な線引きは、やはりキリスト教の上に立つ西洋哲学にどこまでもつきまとっているのであろうか。川原栄峰「ハイデッガーの動物論」、『日独文化研究所シンポジウム 生命の文化論』芦津丈夫・木村敏・大橋良介編、人文書院、二〇〇三年、二八一—四三三ページ。

⑳ Jakob von Uexküll, *Sreifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*, Berlin, 1934. 『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫、二〇〇五年。

- ㉑ 『生物の世界』、『全集』第一巻五七七ページ。
 ㉒ 「行為的直観」(一九三九年)、『西田幾多郎哲学論集Ⅱ』三〇三ページ。
 ㉓ 『生物の世界』、『全集』第一巻七〇七―七一一ページ。
 ㉔ 「霊長類研究グループの立場」(一九五七年)、『全集』第七巻八二二ページ。
 ㉕ 「溪流のヒラタカゲロウ」(一九六九年)、『全集』第八巻二七〇ページ。
 ㉖ 『生物の世界』、『全集』第一巻七八八ページ。
 ㉗ 同、八一―八二ページ。生物が自分と同種の個体を「認める」というこの働きは、今西が後期から晩年にかけて、アイデンティフィケーション、さらにはプロトアイデンティティの理論として掘り下げていくテーマである。
 ㉘ あくまで自己の個体維持から論拠づけがなされている点に注意されたい。往々にして思われがちだが、今西は決して単なる全体論者ではない。まして、政治的全体主義と同一視する曲解にいたっては論外である。
 ㉙ 『生物の世界』、『全集』第一巻九二二ページ。
 ㉚ 『生物社会の論理』、『全集』第四巻五八八ページ。
 ㉛ 『生物の世界』、『全集』第一巻九六―九七七ページ。
 ㉜ 面白いことに今西は、ハチやアリの通常呼ばれている「社会」を、社会とはみなしていない。社会とは、独立自活能力(個体維持能力と種属維持能力)をそなえた個体同士の働きかけあいからなるオーガニゼーションと彼は定義するが、生殖能力を欠いた働きバチ(アリ)も、自分でエサを摂れない女王バチ(アリ)も、そうした個体の要件を満たさないからである。むしろかれらは巣の全体で一個の個体のようなものであり、今西はこれに「超個体的個体制」の用語をあてる。「人間以前の社会」(一九五一年)、『全集』第五巻九二―九六六ページ。
 ㉝ 『生物の世界』、『全集』第一巻八五―八六ページ。
 ㉞ 同、九三―九四ページ。「」内は引用者による補足。
 ㉟ 『善の研究』一〇三―一〇四ページ。「」内はもちろん引用者による。
 ㊱ 『生物の世界』、『全集』第一巻一三二―一三三ページ。
 ㊲ 「もしもこの地球上の生物が、いろいろな星から移住してきたもの、す

『生物の世界』を読む

なわち起原を異にしたものの寄合い世帯であったならば、私もその間で闘争のおこる可能性を認めないとはいわないだろう。しかし、もとは一つのものから分化発展したものとみるならば、その部分同士のあいだに闘争がおこると考えることは、「中略」まったくおかしい、考えにくいことではなければならぬ。「自然学の提唱」(一九八三年)、『全集』第一三巻六九―七〇ページ。

- ㊳ 『生物の世界』、『全集』第一巻二二三―二三四ページ。
 ㊴ 同、一四七―一四八ページ。ここから悪名(?)高い「種が変わるべき時がきたら、すべての個体がいつせいに変わる」というフリーズが後に生まれることになる。しかしアスキスの指摘するように、チャールズ・エルトンの生態学、特に選択は個体ではなく個体群全体に対して働くという説が今西に影響したのだとすれば、それなりに科学的根拠を持った主張とみなせるのではないだろうか。アスキス前掲論文、一四五―一五五ページ。
 ㊵ 『生物の世界』、『全集』第一巻一四五―一五五ページ。
 ㊶ 同、一四四―一四五ページ。
 ㊷ 「論理と生命」、『西田幾多郎哲学論集Ⅱ』一八七―一八八ページ。
 ㊸ 「動物的生命の世界は種の形態を構成し行くが、歴史的身体的なる人間の世界は、しかのみならず、社会を形成して行くのである。」同、二五四―二五五ページ。同様の見解・表現は西田のさまざまな著作に頻出する。
 ㊹ 「西田さんは、「中略」東洋的思想を西洋哲学の論理によって表現しようとしたのであろうが、それはちよつと無理なことであり、けっきよくは失敗におわったのでなからうか、という気がする。」「哲学のことども」(一九七一年)、『全集』第九巻四五―四六ページ。
 ㊺ 『生物の世界』、『全集』第一巻一四〇―一四一ページ。
 ㊻ 「霊長類研究グループの立場」、『全集』第七巻八一―八二ページ。
 ㊼ 「今西自然学」について、『全集』第一三巻五―六ページ。
 ㊽ 同、七―八ページ。
 ㊾ 「カゲロウ幼虫から自然学へ」(一九八三年)、『全集』第一三巻五六―五七ページ。
 ㊿ 「自然学へ至る道」(一九八四年)、『全集』第一三巻一六―一七ページ。
 ㊽〇 「生態学と自然学とのあいだ」(一九八六年)、『全集』第一三巻二八―二九ページ。

- ⑤2 たとえば「自然学へ至る道」、『全集』第一三卷二七五ページ。
- ⑤3 「自然をどうみるか」(一九八二年)、『全集』第一三卷二三三ページ。
- ⑤4 「ある対話」(一九八〇年)、『全集』第一一巻三二一ページ。
- ⑤5 同、三二二ページ。
- ⑤6 「小田柿進二著『文明のなかの生物社会』の序・生物社会学のことども」(一九八五年)、『全集』第一三卷三六九ページ。この直観がプロトアイデンティティであり、アイデンティティ(帰属意識)以前の無意識的なものであることを示すため「プロト(原)」の語がつけられた。
- ⑤7 今西グループの仕事を高く評価するオランダ出身の霊長類学者フランス・ドゥ・ヴァール(一九四八―)は、類人猿やその他の哺乳類、さらには人間にみられる、無意識のうちに他者の身体行動の中に自己を投影することで他者とコミュニケーションする性向を、リップスの「Einführung(感情移入)」の英訳語である「empathy(共感)」の語で呼び、それが動物の社会行動と、その延長上にある人間の道徳との基礎をなしていると述べ
- る。Frans de Waal, *The Age of Empathy. Nature's Lessons for a Kinder Society*, New York, 2009. 『共感の時代へ 動物行動学が教えてくれる』と』柴田裕之訳、西田利貞解説、紀伊國屋書店、二〇一〇年。
- ⑤8 個体識別法は今西が最初の発明者ではなく、アメリカのクラレンス・レイ・カーペンター(一九〇五―七五)が一九三〇年代に先んじて行っていた。しかし、フィールド調査終了後にサルを撃ち殺して胃の内容物を調べ、剥製標本にして持ち帰るというカーペンターの研究方法は、今西のそれとはかなり趣を異にしている。松沢哲郎「今西錦司とバイオニア・ワーク 山登りから霊長類学へ向かう軌跡」『科学』(岩波書店) 第七三巻第一二号、二〇〇三年十二月、一三四七ページ。
- ⑤9 『人間以前の社会』、『全集』第五巻八一―二〇ページ。
- ⑥0 『生物の世界』、『全集』第一巻二〇ページ。

(本学非常勤講師)